

# 「名人伝」小考

『列子』湯問篇孔周所藏宝劍の形象を用いて

甲 斐 勝 二

はじめに

(一)

中鳥敦の「名人伝」については、既に多くの論考がある。しかもさまざまな視点が精密な読み込みと詳細な調査および筋の通った論理で語られており、門外漢の筆者は「なるほど、なるほど」と読むことしかできない。しかしながら、本務校の授業で『列子』に触れたとき、「名人伝」の理解に用いることができそうな物語に気づいた。「名人伝」が『列子』の記事に基づいていることは既に定説である。だとすれば『列子』のなかのその他の物語も念頭においていたことは十分推測できる。ここに挙げる物語は、管見の及ぶところ、その説明に引く人はなくまた触れる人もいない。触れる人すらいないのは、やはり全く関係がないからかもしれないのだが、それでもいつかはどなたかに聞いていただき、私見の成立の可否を尋ねてみようと思っていた。お世話になった日語日文学科の先生方が今年度で御退職と聞く。この機会に未熟承知で資料として日語日文の先生方に提示し、考えるところを述べてみたい。

筆者が提示する物語は、中鳥が「名人伝」を書くに当たって参考にしたであろう『列子』湯問篇中の甘蠅・飛衛・紀昌の物語の後に馬術の話を一編おいて出てくるものである。近接しているので、中鳥が『列子』閲読の折に続けて読んで可能性は高い。

この物語は父を殺害した黒卵という男に、宝劍を借りて復讐を図る丘来丹の話で、内容は以下の通りである。

丘来丹はその父を黒卵という男に私怨で殺されてしまう。黒卵を父の仇として我が手で屠らんと復讐の意気込みに燃える丘来丹だったが、頑丈剛健な身体を持つ黒卵からするとひよ子同然で、とうてい歯が立ちそうもない。友人の申他という者に相談すると、孔周という人物に宝劍を借りることを勧められる。そこから先の物語は中鳥が見たはずの漢籍国字解全書の漢文読み下し文とそこに付された江戸の儒者太田玄九の講述文を（一）の中に入れてあげることによつて。

申他曰く、吾聞く衛の孔周其の祖殷帝の寶劍を得たり、一童子之

を服れば三軍の衆を却く、奚んぞ請わざる焉（申他重ねて我れ  
ききたることあり、衛國の孔周と云ものの先祖は殷の天子の寶  
劍をつたへ得たり、三尺の童子と云へどもこの劍を帶すれば三  
軍の大勢を一人にて追退ける、この劍を借りてこぬぞ）、

來丹遂に衛に適て孔周に見え、僕御の禮を執り、請ふて先づ妻子  
を納し、後に欲する所言ふ（そこで來丹は衛の國にゆき孔周に  
逢ひ、主人の如くたつとび、先づ我が妻子を人質の如く孔周が  
家に入れて其後に思ふ處を云である）、

孔周曰く、吾に三劍有り、唯に子の擇ぶ所のままなり、皆な人を  
殺すこと能はず、且先づ其の状を言はん（孔周其志しを感じて  
吾に三ふりの劍がある、いづれなりとも望みにまかせてやらう、  
去れどもこの三劍はどれも殺すことはならぬ、先ずわざまえを  
云はん）、

一を含光と曰、之を視るに見るべからず、之を運するに有ること  
を知らず、其の觸るる所や、泯然として際無し、物に經て物覺  
えず（含光と云劍はぬいてみるにあるやらないやら一向みえぬ、  
運すとはふりまはしてみること、ふりまはすに物はあれども形  
はみえぬ、打ちかけてふるる處まふたつに切れれば切るれども泯  
然として切り口がない、物にふれ身にあたりても痛くも痒くも  
少しもおほえがない）、

二を承影と曰ふ、將に旦げんと味爽の交、日夕昏明の際だ、北面  
して之を察るに、淡淡焉として、物の存すること有るが若し、  
其の状を識すること莫し（承影と云劍は夜のあけんとする時く  
らきとあざやかとのあはひ、又日の入らんとして入りきらぬ時  
日暮には北に向、然れば明旦には南に向ふこと知るべし、夕に

北と云て旦に南と云はぬは文を省いたものぢや、古文の目の付  
處である、日かげを受けてよくよくみれば淡々となにやらみゆる  
やうなれども眩と形は見えぬ）、

其の觸るる所や、竊竊然として聲有り、物に經れて物疾まざる也  
（この劍にて切れば音がする、竊竊はきる音ぢや、音のするほど  
すつぱり切れて少しもいたまぬ）、

三を宵練と曰ふ、晝に方では則ち影を見て光を見ず、夜に方では  
光を見て形を見ず（宵練はひるみれば劍のかげばかりみえてひ  
かひかとはせぬ、よるみればひかりひかりしたばかりで、是れ  
も形はみえぬ）、

其の物に觸るるや、驕然として過ぐ、隨て過ぎ隨て合う、疾こと  
を覺れども刃に血さず焉（この劍にてきれば驕然がはりど音が  
して切れる、過るとは水もたまらずされるを云、隨過と云は打  
かくればすぱりとときれ、切てしまえば直にいえ合ふを云、痛め  
ども血の出るなどと云ことはない、この劍を來丹がうけた下な  
るものぢや）、

此の三寶は之を傳ること十三世矣、而して事に施すこと無し、匣  
して之を蔵む、未だ嘗て封を啓かず（この三ふりの寶劍は傳來  
すること十三代に及べども人を切たこともなく、匣に入れたま  
まついに封をきらぬ）、

來丹曰く、然りと雖も吾必ず其の下れる者を請ん（大切の寶劍で  
はござれども中でいつち次ぎな御劍を申しうけたい）、

孔周乃ち其の妻子を歸へし、與に齋すること七日、晏陰の間だ跪  
て其の下劍を授く（孔周はそこで來丹が妻子をかへしともに精  
進齋齋すること七日の後に、日くれ晏陰のくらがりにて正坐し

て宵練の下劔を來丹にさづけあたま、

來丹再拜し之を受け以て歸る（來丹この劔をうけて家にかへり）、來丹遂に劔を執て黒卵に從ふ（それより劔を提て黒卵をつけねらふ）、

時に黒卵之酔ひて牖下に偃を、頸自り腰に至るまで三つに之を斬る（或る時に黒卵がまどの下に酒に多ひて寝てゐるを首から腰まで三つに切る）、

黒卵覺えず（去れども黒卵は少しもおぼえず）、

來丹黒卵が之死せりと以ひ趣て退く、黒卵の子に門に遇ふ、之を撃つ三下するに虚を投へるが如し（來丹は黒卵が死せりと思て走て立ちのく時に門にて黒卵が子に逢ひたる、三つに切るになにもない處を打つやうである）、

黒卵が子方に笑て曰く、汝何を蚩り三たび子を招く（黒卵が子笑て汝はなにゆゑ我をばかにして三度招くと云）、

來丹劔の人を殺すこと能はざるを知るや、喚て歸る（扱はこの劔にては人を殺し敵を討つことはならぬとなげいてかへる）……以下略、

申他の提示した孔周所蔵の宝劔は殷の皇帝から伝わる名劔で「一童子之を服すれば三軍の衆を却りぞけん（三尺の童子と云へどもこの劔を帯すれば三軍の大勢を一人にて追退ける）」ほどの力量があると聞くものだ。さればと來丹は、妻子を人質にして孔周に宝劔を借りに行く。いかに頑強な身体の黒卵でもこの劔を使えば難なく斬り捨てることができると考えたわけである。しかしながら、孔周所蔵の三振り之宝劔は、どれもが切れすぎて身体をすり抜けるばかりで

分割ができない。しかも、その形体すらあるやなしやの代物であった。その宝劔は劔としての機能を突き詰めた結果薄くなりすぎたのである。來丹はそれでもその一振りを借り、黒卵やその子を襲つて確かに体を三つに斬つてしまふのだが、結局のところ、相手には斬られたことすら気づかれずため息をついて帰るという話である。この話の主題が宝劔の存在にあることは論を俟たない。筆者が注目するのはこの宝劔の形象である。この宝劔は、武器の劔でありながら武器としての役割を失っている。しかしそれにもかかわらず宝劔たる所以は、劔としての機能を突き詰め、もはや形而上的存在になつているところにある。

劔というものは、武器としては人を斬り、物を切る道具であり、切り分けるのがその機能である。使用者の劔に求めるのはここにあるはずだ。切り分けるためには、鋭い刃が必要だ。その鋭さはどこから来るか、それは刃の薄さに由来する。したがって刃は研がれねばならない。研いで磨いて薄くすればするほどよく切れる、とは誰もが考えることだろう。そうやって、徹底的に薄くしてしまい、向こうの風景が透き通つて見えほどに仕上げられたのがこの宝劔である。まことに技術の粋を尽くした宝劔といわねばならない。もし、それほど薄く仕上げられているとすれば、どんな物でもすいすいと力も入れずに切れるはずだ。だとすれば子供でも大軍を追い返せるに違いない。振り回すだけで兵士の鎧でも兜でも触れる先からスパと切れるに違いないからだ。したがって、その宝劔の話から「一童子之を服すれば三軍の衆を却りぞけん」という伝聞が広がることも不思議ではない。しかしながら、この宝劔は切れ味を追求して薄く研がれすぎてしまった結果、人体をすり抜けてしまうほど薄くなつ

てしまい、切ることはできても分割はできなくなってしまった。現代物理学の常識からしてこれが実際に可能か否かはわからない。とはいえ、『列子』が書かれた当時の認識ではこのような想定も許されたのだから。剣の形はかろうじてとどめていても、これで果たして剣と呼べるかどうか。持ち主もそれを知っていて、代々伝わる宝剣として蔵しながらも実用の剣として使ったことはなかったのである。

この宝剣の話は、その事物が持つ機能や能力を論理的にとことん突き詰めると、その結果どこまで行ってしまうのか、またそれを世間がどう見てしまうのかを伝える寓話として読むことが可能である。筆者にはこの宝剣とその周囲の期待の有り様が、弓やその使い方を忘れてしまった「名人」紀昌の姿と、その紀昌に絶妙の射術を期待する世間との関係描写に重なってならない。そこで、この宝剣の形象を中島が考えていた具体的な「名人」の姿であろうと想定して、この物語を考えられないかというのが拙論のもくろみである。

## (二)

名人伝は四段に分けて書かれている。一段から三段までは、天下唯一の弓の名人をめざす紀昌の貪欲な姿が描かれる。ここでは概ね『列子』中の物語を素材にして、がむしゃらに射の技術の向上を求める愚直過ぎるほどの紀昌の描写で話が進む。第三段までの理解では研究者間の視点の差異は少ないようだ。

ところが、四段目、九年の修行を経て山から邯鄲におりてきた紀昌の変化をどう考えるかになると視点が大きく分かれてくる。変わってしまった紀昌の姿をいかに解釈するか、それによって「名人伝」

の理解にも違いが現れている。

例えば小椋山氏は「紀昌が名人ではなくただの愚夫となって戻ってきた」と解釈し、「芸術という狂気の世界に飛び込んだ果てに人間性を喪失したことを物語っている」と、芸術追求者の観点から論じ、実際は名人にはなっていないと考える。

一方富谷氏は紀昌に列子にいう最高の境地「至人」への変化を認め、鬪鶏においてすべての鶏を戦わずおいかえす絶対勝者としての木鶏のごとき名人（至人）の姿を紀昌に見ようとする。

もしここで、先掲の宝剣の姿を「名人」の具体的な例とみなし、これに紀昌を重ねて読むとすればどうなるか。弓すらも忘れてしまった射手の紀昌は、射の権化や鬪鶏の領域に君臨する木鶏の域すら越えて、もはや世間の考える射手としては実際の役に立たない高みまで到達した者、そのような存在として紀昌を扱おうと中島は考えていたと推察できるのではないか。それは富谷氏がいう「至人」であることを否定するものではないし、まさに「その道の深奥を極めた者」であることは間違いない。しかしながら、その時には世間がその物をその物としていた機能は既に失われている。それは先に挙げた宝剣同様、射手の名は残しながらも、既に世に期待される射手ではなくなっている姿なのではないか。これを世間的評価基準で見るとすれば、小椋山氏のいう「ただの愚夫」と呼んでもよいだろう。では、そのような紀昌を中島はどう位置づけようとしているのか。ここからも作家中島への理解から意見が分かれるだろうが、筆者は個人のめざす芸道と世間の期待とは詰まるところは別物であること、つまり世間が期待する芸道と芸道自身は最終的には別物として存在するものだという視点をそこに読みとれることを指摘してみたい。

甘蠅の下での修行を終え山からおりた紀昌を「名人」と評したのは飛衛であった。この飛衛は紀昌に様々な射の芸を教え、射の実用性の中に止まりながらも、甘蠅の存在も知るように、その芸の世界では第一級の達人である。だとすれば「射」の芸を突き詰めればどうなるかに気づいていてもおかしくはあるまい。しかしながら、飛衛が紀昌を「之でこそ天下の名人だ」と呼んだとき、周囲の聴衆は「百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中する」という飛衛を越える絶妙の射技を見せてくれる名人として理解した。こうして世間ではその到達点もたらず結果を知らぬまま、短絡的に名人の名に相応しい芸を期待し、様々な噂が生まれてくる。これは、先掲の実用の役に立たぬ宝剑が、「一童子之を服すれば三軍の衆を却りぞけん」という評判を伝えるのと同様な事態ではないか。だとすれば、このすれ違いを諧謔的な寓話として書いたのが、この「名人伝」だと考えることも可能なのではないか。

念のため述べておけば、紀昌が甘蠅の下で行った九年の修行でどんな修行をしたか、それについては、問う必要はあるまい。宝剑の例を例にすればわかるように、向こうが透けて見えるほど薄く研ぎ上げるためにはどこかで現実実用の次元から別の次元に飛躍する必要がある。同様に紀昌が到達した境地も、現実の階梯を踏んで到達できるものではなくどこかで飛躍する必要がある。そのための時間として示されていると考えるだけで十分ではないのか。このような手法は一見荒唐無稽の話を用いて真理を語ろうとする寓話の中にはしばしば見られるものである。<sup>(註9)</sup>

### (三)

このすれ違いを描いた寓話は中島にとつてどんな意味があったのか。当時の中島はこのようなすれ違い、あるいはずれというものはかなり意識していたふしがある点に注目したい。というのは類似的な思考法がほぼ同時期に書かれた「章魚木の下で」の中に見いだせるからである。もし、その類似的意識を指摘できるなら仮説を用いた先の私見も妥当性をいささか増すことができるだろう。

「章魚木の下で」は南洋から東京に戻ってきた折の中島の心情を記すものである。その中で、帰国後に感じた当時の日本の文学状況と自分の考える文学とのずれを「南洋呆けして粗雑になった私の頭には、少々微妙に過ぎ難解に感じられることが無いではなかった」と記している。その理由は、どうやら当時の文壇に流れていた時局的色彩を盛った作品を書き、国家的目的の遂行に必ずしという気風にあつたようである。<sup>(註10)</sup> 中島は次のように述べている。

ともかくにも其等の文章を通じて、文学をする者にとつての現在の問題というものが臆げながら判つては来た。……(私は)戦争は戦争、文学は文学。全然別のもつと思ひ込んでいたのだ。……書くものの中に時局的色彩を盛らうと考へたこともなく、まして、文学などといふものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考へもしなかつた。……其の程度のボンヤリした考へで東京へ出て来たものだから、種々な微妙複雑な問題の氾濫にすつかり吃驚したのである。

驚きながらも中島は、文学の活動と、世間が求める效用との間に線を引こうとする。

文学者の学問や知識による文化啓蒙運動が役に立ったり、文学者の古典解説や報道文製作術が役に立ったりするのは、之は文学の效用といつて良いものかどうか。……斯ういふ粗い考え方は余りに文学を見縊つたように見えるだらうか。私自身としては毛頭そんなつもりは無い。却つて文学を高い所に置いてゐるが故に、此の世界に於ける代用品の存在を許したくないだけのことである。

中島にしてみれば、文学の活動は時勢が作家達に求める文化啓蒙運動や古典解説、報道文製作といった技術を越えた高みにあつた。従つて文学をする者はその文学の完成をめざせば好く、時勢の要望に従ふ必要はないと考えているようである。

この作品と文壇との関係は、「名人伝」の中にみえるそれ自身で完成しもはや世間の期待に応えようとはしないしできない紀昌と、その芸の完成を彼らの期待の実現を導くものと考えて高い評価を勝手に与える周囲の人々や画家・武士達、その間に一線を引くという考え方に類似するのではあるまいか。もちろん「名人伝」の紀昌はかなりデフォルメされているけれども、そこに中島の考える文学活動の位置づけを重ねて見ることができそうなのである。だとすると、筆者には、この二つの分野に起き得る関係への視点を、中島は「章魚木の下で」では控えめに書き、「名人伝」ではその関係を一般化し、揶揄も含めて寓話化して描いているように思われるのである。

「名人伝」の具体的な構想や執筆は「章魚木の下で」よりも数ヶ月前には始まつていたはずだが、「章魚木の下で」の言葉からすると、この問題は南洋にいた頃から気になつて来たようである。それによると当時は文学の「実用」を巡つて未だに逡巡しているように見えるのだが、「名人伝」の中に描かれた紀昌とそれを巡る世間との関係を見るかぎり、中島の胸の内では結論はすでに出ていようである。これを橋本氏は以下のように述べている。

少なくとも「戦争」と「文学」との関係性に対する中島の基本的な考え方は一貫していた。「戦争」と「文学」とを明確に分離することで、時局に与しない「ほんもの」の文学を希求した帰国後の中島は、戦時下の阿諛迎合風潮の中、「文学」の真価を見極める「曇りのない眼」によつて、南洋を舞台とする作品や中国古典を素材とする作品世界に向き合つていたといえよう。

#### 終わりに

以上これまで頭の隅で気になつていた「名人伝」を巡つて私見を書き付けてみた。自分なりの考察の手順を踏んだつもりだが、結論自体はどなたかの説を言い換えただけのものになつていような気もする。先生方の御指正をお待ちしたい。

#### 注

(1) 「名人伝」の最近の研究動向については、中野和典「空所の意味Ⅱ

——中島敦「名人伝」と「山月記」——」（叙説Ⅲ－17花書院二〇二〇・一）を参照し、他の論考の先行研究の記述を参考にしている。

(2) 佐々木充「名人伝」——中島敦・中国古典取材作品研究（三）参照。

(3) 福岡大学日語日文学科の今年度退職される先生方には長い間大変お世話になった。本来日本の近現代文学には疎遠な筆者が、批判を承知で「名人伝」についてここに私論を示そうとするのは、学恩に少しでも報えれば、と考えてのことである。とりわけ山田洋嗣先生には、大いに助けていただいた。改めて感謝申し上げたい。また、投稿を許していただいた日語日文学科の先生方にお礼を申し上げます。参考「中島敦『名人伝』の構造」新井通郎（二松学舎大学論叢第70輯二〇〇三・三）。テキストは国立国会図書館デジタルコレクションにより、訓読や表記は基本的に原文に従い、読みを補った。

(5) 列子の物語の中には、当時の科学認識を反映するような話もある。例えば人造人間の話が出てくる。体の要素をそっくりまねして作りそれを組み立てると人間同様に行為し人間同様の心まで持つ人形の話で、フランケンシュタイン博士の作った怪物と類似する話だが、これなどは臓器と臓器の間に隙間やつぎめがあり、それが組み合せて人はできているものだど当時の人々が考えていたことを知らしめるものである。『列子』に出てくる物語は、現実の事象が観念的に仕上げられ、論理的に突き詰めて行く内に現実の描写がいつの間にか意識や観念のみによって構築される世界（現代的表現を用いるならばコンピュータグラフィックの仮想世界）へと導かれるようなところがある。この宝剣の話もその一例である。なお、この宝剣は、唐の盧重玄の理解に依れば、道に至った人物と同様のものに見なされている。（『列子集釈』（楊伯竣・中華書局・一九七九・一〇）

(6) 奥野氏が「名人」になってかえってきた後の世間の諧謔的な描写について「世俗に向けられた風刺は紀昌の至りついた独自の名人の境地を否定するよりはむしろ補強してさえないといえるのではなからうか。このような弓の名人が事実としてよりもむしろ論理としてあり得るとというのがこの作品のテーマとなるものであろう」と語っているのは、この宝剣の存在と重ねて考えることができることを示唆するものではないか（奥野政元『中島敦論考』第十三章 桜風社 S 六〇・四）。

(7) 小椋山耕二「芸術家の覚悟・『名人伝』論」『都大論究』四一号二〇〇四年六月）参照。小生の『列子』の理解によれば、『列子』の説く世界は世間一般の人間にとつては「仮想」の世界に近似する。その「仮想」こそ「真実」なのだを示そうとするところに『列子』の思想がある。列子が引く物語にもそれを証明しようとする話が多い。従って、「真の名人になったか否か」の問題は世間の一般常識的な名人芸を期待するのであればとても名人とは呼べないが、列子的な視点からすればそれを名人（至人）とよぶ事に不思議はない。

(8) 富谷至「四字熟語の中国史」岩波新書新赤版一三五二、八六頁（二〇一二年）なお、この問題については、中野和典「空所の意味Ⅱ——中島敦「名人伝」と「山月記」——」（叙説Ⅲ－17花書院二〇二〇・一）に要を得た整理説明がある。

(9) 中野和典「空所の意味Ⅱ——中島敦「名人伝」と「山月記」——」（叙説Ⅲ－17花書院二〇二〇・一）ではこれを「不可視化する」と述べる。

(10) この情況についての具体的な例は木村一信「文学史的定位の基点——『章魚木の下で』を視座として」（『中島敦論』所収 双文社版 一九

八六・二二)に詳しい。

- (11) 「名人伝」は昭和17年の7月に執筆の依頼を受けているようなので、中島が執筆に取りかかったのはこの前後らしい。木村一信「『名人傳』論」(『中島敦論』所収 双文社版 一九八六・二)

- (12) 「章魚木の島で暮っていた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別していたのは、「自分が何か実際の役に立ちたい願ひ」と、「文学をボスターの実用に供したくない気持」とが頑固に素朴に対立していたからである。章魚木の島から華の都へと出て来ても、此の傾向は容易に改まりそうもない。」という(『章魚木の下で』『中島敦全集』筑摩書房 S五一年)。

- (13) 橋本正志「中島敦「章魚木の下で」論——島木健作『満州紀行』の影響を中心に——」(『別府大学紀要第61号二〇二〇・二二)